

発表レジュメ

「生命倫理への宗教哲学的一考察

- 西田哲学と道元の禅思想を介して -

花岡永子(奈良産業大学)

I. 論究の基礎

自覚の四段階— 自我、実存、生（あるいは虚無的個）、真の自己。

P. Tillich(1886-1965)と Joachim de Floris((フィオーレのヨアキム、
(1130頃—1202) 西谷啓治からのヒント。

思考の枠組みであるパラダイムの五段階— 相対有、相対無、絶対有、虚無、絶対無。
西田哲学や臨済からのヒント

生命の五段階— 物質的生命、生物的生命、動物的生命、精神的いのち、宗教的いのち
西洋と東洋との峻別は不相当と考える。

(西洋には、絶対無のパラダイムは存在しなかったが、西洋にも東洋的な発想や考え方は各時代に垣間見られる)。

発表者の視点

キリスト者にして、禅に生きる者。(発表者にとっての「禅」とは、仏教の一宗派としての禅宗での禅ではなく、諸宗教に通底する諸宗教の根源、いわば「根源的いのち」)。

II. 西田の生命論

『西田幾多郎全集』第8巻所収の論文「論理と生命」を考察の中心に。

(西田哲学の前期(純粹経験が中心) 中期(場所論が中心) 後期(歴史的事実の世界が中心)に分けた場合の後期の哲学は、第8巻の「哲学論文集第一— 哲学的体系への企図 —」(1935)あたりから。第8巻の後半では、「哲学的論文集第二」の第一論文が、「論理と生命」1936)。

歴史的事実の世界は、对象的認識の論理とはその性質を異にする。

歴史的事実の世界は、歴史的生命の形成作用において成り立っている(「歴史的生命の論理」)。

歴史的生命の形成における「生命の矛盾」= 「自己を否定することなくして、自己を否定するものを否定することができない」(8巻361頁)(=個と世界との相互限定)。

歴史的生命の形成における人間の「目的的形成作用」と世界の「表現的形成作用」との絶対矛盾的自己同一的形成作用(『西田哲学全集』第10巻所収、「実践哲学序論」、1940,参照)の働きによって、歴史的生命が形成されて行く。

従って、人間の個の生命は、一方では、世界の表現的形成作用の一要素、一表現点となって自らの生命が絶対的に否定される。しかし、他方、同時に、世界の表現的形成作用の自己限定によって、個は生かされ、目的的作用的に形成される。これら両者の働きは、根源的には、即ち「絶対無の場所」(=自我が絶対的に否定される、至る所絶対の中心であると同時に常に周辺上の一点でしかないような無限大の球に喩えられる)では、絶対矛盾的自己同一的に成り立っている。

絶対無の場所では、生と死の二元性のみならず、一切の事柄の二元性、両極性、対極性は、絶対に対立し、矛盾しながらも、絶対矛盾的自己同一的に成り立っている。
例：時間と空間、事と理、一と多、過去と未来、「見る」と「働く」、「理性的なもの」と「現実的なもの」、論理と論理以前、生死と涅槃 等々。(『西田幾多郎全集』第9巻所収「絶対矛盾的自己同一」1939 参照)。

III. 道元の『正法眼蔵』、生死の巻（1231頃—1234頃）

「生死」即 「涅槃」

「生」即 「不生」

「滅」即 「不滅」

○道元の「生死」の禅思想が哲学的に論理化されたものが、西田哲学での生命論。

○西田の生命論での生命とその基礎とも理解され得る道元の『正法眼蔵』の生死の巻の生死の理解は、現代に最も必要である「宗教的いのち」と理解されることができる。

IV. 生命倫理について。

○「生死事大、無常迅速」（景德伝灯録、正法眼蔵随聞記に出てくる言葉）と

「生死 即 涅槃」との絶対矛盾的自己同一で生きる倫理の必要性。

○「身心一如」の人間の個の自己における「生と死の一如」の倫理の必要性。

○そのような倫理とは、自覚の倫理。

○自覚の倫理とは、対話を通しての、自我の絶対否定の倫理。

（百尺竿頭で一步を進め、自我の大死を遂行する倫理。）

参考文献

『西田幾多郎全集』、全巻、岩波書店、1965-66。

『西谷啓治著作集』、全巻、創文社、1986-95。

Paul Tillich , *Systematische Theologie*, Bd. I-III, Evangelisches Verlagswerk, Stuttgart, 1951-1963.

『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』（日本古典文学体系 81）、西尾実、鏡島元隆、酒井得元、水野弥穂子 校注、岩波書店、1965。